

40歳以下の若年者大腸癌

Colorectal cancer in patients younger than 40 years of age: Smith C, Butler JA (Dis Colon Rectum 32: 843-846, 1989)

1956年から1985年までの30年間、40歳以下の大腸癌患者について予後因子を評価した。患者数は50名で、年齢は7歳から39歳、平均は35歳であった。男性が27名、女性が23名であった。familial polyposisが3例、潰瘍性大腸炎が2例含まれる。

最も一般的な症状は、腹痛(66%)、血便(60%)、排便習慣の変化(41%)、体重減少(30%)であった。病理上の staging は44例になされたが、Dukes' A が1例(2%)、Dukes' B

が13例(30%)、Dukes' C が20例(45%)、手術時に遠隔転移を認めたものが10例(23%)であった。

5年生存率は28%、このうち disease-free survival (DFS) は18%、生存期間の中央値は28か月であった。予後を悪くする因子としては、Dukes' C, D ($p<0.001$)、症状が3か月以上持続したもの ($p=0.01$)、白色人種でないこと ($p=0.01$)、病理上で低分化型 ($p=0.01$) などが挙げられる。白色人種の予後が良い理由は、社会・経済的な問題から、Dukes' D の割合が少ないためと思われる。5年間の DFS は、Dukes' A, B の患者では年長者の大腸癌と比較して差が認められなかったが、Dukes' C の患者では5%にすぎず、他と比較しても明らかに低かった。

Dukes' C, D の患者の5年間 DFS は30名中1名(3%)のみであった。病理上、腫瘍はすべて腺癌で、高分化型6例(16%)、中分化型19例(50%)、低分化型13例(34%)であった。このうち、ムチン産生は7例(18%)にみられた。若年者では低分化型の占める割合が高かった。

40歳以下の大腸癌患者の生存率の低い原因としては、診断の遅れ、病期の進行した例が多いことが挙げられる。たとえ若年者であっても、腹痛、血便、排便習慣の変化、体重減少などの症状が認められた場合には、大腸癌の可能性を考慮して素早く対処すべきである。

(愛知県がんセンター消化器内科

保原怜子 抄)